



無用の用

宗林 由樹*

本財団の伊藤光昌評議員は、本財団とその研究活動を「無用の用である」と評された。恥ずかしながらそれまで私は「無用の用」という言葉を知らなかった。これは老子と荘子に起源をもつという。インターネットで調べてみると、たとえば『老子』には「粘土をこねて器を作る。器の中の空間は一見無用に見えるが、その空間があるから器として役立つのだ」とあり、『荘子』には「人はみなあきらかに役立つものの価値は知っているが、無用に見えるものが実は役立つことは知らない」とあるらしい。また人によっては、荘子は「役に立たない？ それはどうした」と聞き直っているのだと解釈する向きもあるらしい。いずれにしても、この言葉は基礎研究のすがたを言っている。

私は、35年にわたり水圏の微量元素の研究を続けてきた。最初の学生時代から、微量元素の分析法を新しく開発し、それをを用いて海や湖における元素の分布をあきらかにすることに喜びを感じていた。多くの人から受けてきた質問は、「その研究は何の役に立つのか？」というものだ。若いころには、その質問に正面から答えるために苦労した。しかし、その答えはこじつけであって、実はただたんに新しい発見が楽しくて研究していたのだ。年につれて、まわりの状況の方が変化した。Martinらの研究により、微量元素のひとつであ

る鉄が広い海域において生物生産を支配していること、海洋への鉄散布が大気中二酸化炭素の固定策となる可能性が示され、微量元素が一躍注目されるようになった。私自身の研究においても、分析法の進歩により、人類活動の環境への影響をあきらかにできるようになった。たとえば、琵琶湖北湖の底層では過去数十年間の富栄養化と貧酸素化がマンガンやヒ素の著しい濃度変化を引き起こしたことがわかった。また、北太平洋では人為起源の鉛が北緯35度、深さ200mを中心として海盆全体に広がり続けていることがわかった。

本財団は1980年代に故木田英元理事長らのご尽力により得た寄附金をもとに細々と活動してきたが、2016年に京都府所管の公益財団法人となり、伊藤光昌氏より多額のハーモニックドライブ株のご寄附をいただいた。昨年には、大島光一行政書士の多大なご協力を得て、内閣府所管への移行を果たした。これらにより、本財団は本年度から海洋化学に関わる日本全国の研究者と学生に研究助成を行うことができるようになった。

海洋化学の研究は、環境破壊や軍事に関わるものでなければ、まったく役に立たないものでも構わない。自然の真理をあきらかにすることに情熱を傾ける海洋化学の研究者と学生を支援し、若い人たちを育てるために、本財団は活動を続けていきたい。

*京都大学化学研究所教授、公益財団法人海洋化学研究所代表理事